

『ピュア』イタリア語版 出版記念対談

小野美由紀 × アンナ・スペッキオ
(作家) (翻訳家・日本文学研究者)



(左から、小野氏、スペッキオ氏)

(『ピュア』イタリア語版)

「もしも、女性が男性を食べないと妊娠できない世の中になったら？」という衝撃的な世界での恋愛を描いた小野美由紀氏のSF短篇「ピュア」は、本誌2019年6月号に掲載された後、早川書房noteで全篇公開され、公開直後からSNSを中心に話題を集め、早川書房noteで公開された記事のなかで、歴代もっとも読まれた作品という記録はまだまだ破られていない。

さらに、その「ピュア」を表題作とした、性を抱えて生きることをフィクションの形で問いかける短篇集『ピュア』は、Apple Books「2020年今年のベストブック」に選出され、多くの読者の心を捉えた。

その短篇集『ピュア』が、この11月に、待望の文庫化される。それに先んじて、10月には、イタリア語版 *Donne da un altro pianeta* のタイトルで翻訳刊行された。

今回は、イタリア語版の翻訳者で日本文学研究者でもあるアンナ・スペッキオ氏が来日した2022年1月に、著者の小野氏と対談した様子を、お届けしたい。

■ピュア

小野 「ピュア」は女性が男性をカマキリのように食べるという話で、食べるという行為自体がエロティックでグロテスクだから話題になった部分もありますが、なぜ食べるという設定にしたのかというと、男性と女性のコミュニケーションの断絶を書きたかったんです。食べちゃうということとはコミュニケーションできなくなるわけです。食べた相手がどんな人だったのか、本当に自分は相手のことを好きになれたのかはわからない。性的な対象なのだけど、コミュニケーションが取れていないことって社会的にすごく大きな問題ですよ。

スベツキオ 面白いですね。女性作家の小説のなかでは男性と女性が食べているシーンが多くて、それらの作品では食事から恋が始まるのですが、「ピュア」では食べたから終わりになるので、恋の順番が逆になる。

小野 確かにそうですね。面白い！

スベツキオ 死と性が、食べることによって人生とつながってくる。

小野 二四時間食べることを考えています。「ピュア」も、最後にエイジをユミが

食べるのだけど、自分が生きるか死ぬかという究極の状態で、本当に食べたいものを食べるといっては絶対に快感だろうなと思って書きました。

スベツキオ エイジはかわいそうですが、ものすごい満足感が出ていますよね。

小野 私もこれぐらい毎回の食事で満足したいなと。

スベツキオ 女性がすごく積極的というのも面白いです。普通の小説ではあまりないですよ。男性作家の小説でも、女性はあまり積極的ではなくて、積極的な女性が出てきたのは八〇年代、九〇年代ですが、こんなに積極的に男性を食べるのは山田詠美さんの作品ぐらいでしょうね。

小野 私もそのような作品が書きたくて。**スベツキオ** かわいそうだなと思ったのは、性交一回だけで死んでしまうことです。

小野 性の喜びも生きる喜びもない。でも今の世の中と全く違うかといえそうですが、でもない気がします。

スベツキオ 男性が獲物で。

小野 男性にどう読まれるのかはわからないんですけど。「ピュア」は、初めてSFという形式で書いたのですが、今だったらこういう書き方はしないだろうなというところも結構あります。「子宮が命令するの

よね。手術よりも簡単なのに、わざと高い金額にするのは、女性が自分で産む権利を決めないようにしているのではないかと、いう話もできたりして。

スベツキオ 今の日本で、女性の身体に権利があると思いますか？

小野 全然ないと思います。日本全体というよりも、世界でもまだまだセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルスの権利が女性のものになっていないと思いますし、日本はさらにそうだなと。たとえば中絶に関しても、中絶の同意書に書類上は父親である男性の名前を書かなければならない。

スベツキオ 父親が、自分の子供じゃないと言ったときは、女性はどうするんでしょうか？

小野 困りますよね。子供の父親がダメでも、女性の父親であればサインできるけど、それも変な話です。

スベツキオ 望まぬ妊娠をした若い女性たちは、自分の親には知らせたくないと思いますし、若い男性だと自分の名前を書きたくないということもありますよね。

小野 そこがすごく今問題になってます。教育の面でも法的な整備でも、産む産まないを決める権利が全然整っていないと思います。そういう世界を極端に書い

よ」という一文がありますが、今なら女性に行動を起こさせるのは子宮だと絶対書かないですね。子宮はただの袋なので。これを書く前に、生物学者の福岡伸一さんの『生物と無生物のあいだ』を読んでいて、人間の臓器で言うと、子宮は外側に当たるところから内臓ではないと。男性とセックスしても、それはべつに自分の内部に入ってくるものではないんだと書かれていたのがものすごく印象的で、絶対小説にしようと思っただけです。

スベツキオ それが、ヒトミが言う「オトコだつてコドモだつて、私たちの身体の中に、入ることなんてできないんだよ」という台詞になるんですね。

小野 日本では、女性は妊娠出産によって生き方を変えざるを得なくなる場合が多い。文化や社会制度的に家族や家長長制が優先されがちで、女性は子供を育てるのが役割と未だに見られがちです。でも、生物的には根拠がない。母性という言葉がありますが、男は男だし、子供は子供だし、自分と違う存在であって、母親になったとしても女性はずっと個人のままだじゃないかというのを、福岡先生の本を読んで納得しました。

スベツキオ ウーマンリブにもつながるテ

たら「ピュア」の社会になる。「ピュア」の世界では女性がすごく強くなって、女性が統治しているのだけど、肉体的にも男性より強いのに、国を存続させるために女性に産ませているという。

スベツキオ 作中、産むのは自分のためではなくて国を守るためにしているイメージがあるのですが、誰が国をコントロールしているのか聞きたかったんです。

小野 「ピュア」の世界では国は象徴的、概念的な存在で、誰が管理しているのかという主体がないのだけど、集団を生きのびさせるためにそうしなければならぬと命令している大きな存在になっている。日本語でいうと同調圧力。個人じゃないものというイメージで書いていて、英語版の翻訳者の方にも、ネイションなのかカントリーなのかと聞かれました。

スベツキオ 「ピュア」の世界では、日本だけでなく他の国の女性たちも男を食べている。このままだと産む人たちはどうなるんでしょう。

小野 そこなんですよね。なんのために戦っているかも彼女たちはわかっていないわけですよ。

スベツキオ オーウェルの『一九八四年』みたいですね。

■『ピュア』イタリア語版出版記念対談

ーマです。女性が産む性としてしか見られなかったことに対して、ウーマンリブの活動家は、子宮は自分のもので、身体は女のもので、ほかの男も関係ないというような発言をしていました。「ピュア」は、ウーマンリブの世界のなかで、産みたい社会を作ろうとしたじゃないですか。でも一方で、産みたい社会ではなく、産まないといけないような社会になっている。ヒトミさんの発言とどのようにかわっているのでしょうか。

小野 私の主張はヒトミの言葉を借りて言わせたところもありますが、「ピュア」の世界観は、そのまま今の社会を反映していると思っ書いています。女性の地位は、世界からみればまだまだすごく低い、社会に出てはいるのだけど、一方で、産まなければいけないというプレッシャーがあったりします。日本で今、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（編集部註・性と生殖に関する健康と権利）の運動が盛んになっていますが、たとえば経口中絶薬は最近薬事承認されたけど、とても高価に設定されそうだし、普及までの道のりがとても遠そうなんです。国が手術と同じだけの高い値段をつけている。それだと十代のお金がない女の子は処方を受けれられないです

■『ピュア』イタリア語版出版記念対談

小野 そういう感じですね。
スベツキオ 将来的に国もわからなくなっ
て、自分たちがどうしてこんなことをして
いるのかもわからないまま、でもするしか
ないという。そのなかでユミだけがアウト
サイダーのように、他の選択肢があるので
はないかと自問し始めますよね。ユミは恋
をしましたが、彼女には家族の概念がな
い。もし彼女に家族の概念があれば家族を
作りたくなるのではないかと思っていま
す。
小野 それは面白いですね。なるかもしれ
ない。でも食べたい気持ちがあるからそれ
は難しいという。
スベツキオ 彼女が恋をしていると、自分
でもよくわからないのだけど食べたくな
る。食べたい気持ちは恋よりも愛になるの
ではないかと思いました。
小野 食べたい気持ちは、私は純粹に性欲
だと思って書いていますね。
スベツキオ それは本能だからこそ食べた
くなるという？
小野 本能だと思ひ込まれているという
か。今の社会と男女逆になっているけど、
暴力性みたいなものを食べるといふ行為に
重ねて描いている部分はあります。
スベツキオ まさにカマキリみたいですね。

小野 「ピュア」への批判として、結局ユ
ミは男性と恋愛をして、家族にაცოგれを
もって子供を作るから、それは母性を
肯定しているのではないかと、家族、男
女の恋愛が素晴らしいということを言いた
いのではないかと捉えられたことがありま
したが、私は全然そういうふうには思っ
ていません。あくまでもユミは、社会から押
し付けられている女性はいくつあるべきとい
う姿に反抗したうえで、自分の欲望に従っ
て最終的にこういう結末を迎えたので、家
族や母親って素晴らしいというふうにはあ
まり読んでもらいたくないですね。
スベツキオ 私はそういう読み方はして
いませんね。ユミはコミュニケーション不
足で、コミュニケーションができる場所を
作りたいたいというイメージで。産まなけれ
ばならない社会から解放されたからこ
そ、女性として自立した。
小野 個人としての自立です。
スベツキオ 生理の話も出てきますね。
「生理が来るごとに、私は一ヶ月前と代わ
り映えのしない自分を発見してブルーにな
る。毎月毎月、命にならない細胞片を脚の
間から吐き出して、一体なんの意味がある
のだろう」という文章があります。
小野 ユミが言っていますね。

スベツキオ 生理は、女性が産むという概
念につながるのではないかと思うのです
が、なぜユミはネガティブなのでしょう。
小野 ユミが、この世界では子供を産ま
なければいけないという命令に従わないとい
けないと自分で思っているからこそ、生理
についてネガティブに思っています。生理
が来るということは妊娠していないとい
うことだから、女として評価されていないと
いうふうに思ってしまう。そういう意味で
書きました。
■幻胎
スベツキオ 『ピュア』の収録短篇である
「幻胎」にも生理に関しての文章がありま
すね。私は、「幻胎」は「ピュア」の次に
面白かったです。いろんな面を読めると思
います。フロイトのペニス願望とか、ファ
ーザーコンプレックスの面からも読めます
が、SFとしてなら、より良い人間をつ
く話、ポストヒューマンの概念にもつな
がるのではないかと思います。
小野 「幻胎」は思ひ入れが深く、「ピ
ュア」の他の短篇のなかだと一番書きたか
った話です。
スベツキオ 絶滅した人類の精子が残され

ていて、それが現代人の卵子と結合するこ
とで新しい人間をつくる話が出てきます
が、人間がこれからのように生存戦略し
ていくのかという話はとても文明的です。
また、父と娘の話にもつながっていきます
ね。
小野 家父長制というものに対して女性が
どう反抗していくのかということを含めま
した。生殖の医療、最先端のことをやって
いる一方で、主人公の父親は、昔ながらの
家父長制に囚われていて、女性を道具みた
いに扱っている。それに対して女性がやり
返すという話を書きたかった。でもそこ
に愛なのか恋なのかわからないけど、男女
の気持ち絡み合っているという状態で。
スベツキオ 主人公のゼスが、家父長制に
反対したいのだけど、自分の父親が好きで
反対できないという感じがわかるような気
がします。子供のころから美しい父親が自
分のすべてとして育った女性の話なので、
家父長制的な支配があっても自分の父親に
აცოგれてしまう。だからこそ父親から離
れることができない。こういう女性な
ら、父親に似ている相手を探すのではない
かというイメージがあるのですが、この話
の中では、ゼスのお相手のシンが全然父親
に似ていなくて面白かったです。

■『ピュア』イタリア語版出版記念対談

スベツキオ 女性作家が評価されていないというわけではないですが、作家によって評価されていない人がいるのは確かです。というのも、家父長制についてうるさく言ったりするので。でも評価の高い女性作家もいます。ジャンルの問題ではなく、その人の問題ではないかと私は思っています。日本のSFジャンルの評価は低くないです。どの国でもSFの評価は高いのではないかとと思います。もともと日本のSFという『AKIRA』や『攻殻機動隊』のようなサイボーグ的な話ばかりではないかというイメージがありました。現在の日本SFは、近未来の日本での社会や女性、家族のあり方が描写されているものもあるので、昔のイメージとは違うのではないかと思います。現代の常識を反対にしているような話も出ていて面白いですね。サイエンスフィクションというよりもスペキュレイトイフフィクションと言ったほうがいいかもしれません。自分の想像力を使って社会を創造したりするけれど、必ずしもロボットが出てくるわけではない。サイボーグっぽい主人公が出て人間的な感情があったりするので、どこまでサイエンスフィクションで、どこまでリアルな現在を反映しているのか、境界線がよくわからないです

ただ、もともと男性にとって女性は怪物ではないかと思うんです。日本の古典文学を読んでもそう思いますね。女性が怖いもののように映っていたのではないかと。サイエンスフィクションのなかで、未来に設定されていても、女性があくまでも不思議な存在だからこそ、怪物のようなものではないかと。

小野 不思議ですよ。私もナオミさんも女性ですが、女性を怪物のように描く。

スベツキオ もちろん、いい意味での怪物ですよ。だって、女性は自分に自信があれば恐ろしいものになれるのではないかと思うんです。

小野 それはそうですね。

スベツキオ 女性にはすべてができる力があるんですけど、家父長制があるためにできないのではないかと。ぜひ『パワー』を読んでみてください。マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』にもつながる話ですけど、それに反対する話にもなっています。

小野 日本文学がイタリアでも注目されているという話を聞きますが、なぜだと思いますか。

スベツキオ 三十年前までだと、吉本ばななと村上春樹ぐらいしか翻訳されていないか

ね。

小野 そうですね。現代社会のあり方を考えるうえでSF的な設定を使う、思考実験の道具としてのSFということが最近多いなと思いますし、SFプロトタイプینگなどもその文脈で流行しているのではないのでしょうか。イタリアで近年話題になった小説はありますか？

スベツキオ SFではないですが、エレナ・フェランテという人がいます。彼女が書く『ナポリの物語』四部作。幼なじみの二人の女の子が、だんだん生き方が分かれていって、反発しあったりしながら大人になっていく話で、三島由紀夫の『豊饒の海』のように、どこから読んでもいい。男性作家ではパオロ・ジヨルダーノも。あと、シモーナ・スバラコの『誰も知らないわたしたちのこと』。妊娠数か月で子供を失う女性の話なので。悲しいですが、たいへん素敵なお話です。

小野 今のイタリア文学界のトレンドのようなものはありますか。

スベツキオ イタリアの文学といえば、リアルをそのまま描いているような気がします。なのでリアルな話のほうがイタリア人は読みたいのではないかと思っていました。最近はそのような話がないかな。コロナ禍

だったので、おそらくもともとアニメを見ていた人たちが大人になって研究者になって、自分の好きな作家と漫画を翻訳して、イタリアの読者に届けるようになったからではないかと。

小野 そういう世代が翻訳出版に関わるようになってきたと。

スベツキオ 私もそうなんです。

小野 イタリアで自分の作品を出していただけの意外でした。フランスだとありそうだなと思っていましたけど、どういうところが面白いと思っただけで、どういふところか面白く思っただけで、通用するかなと思っただけです。

スベツキオ 面白いです。とくにイタリア人が気に入っているのは「ピュア」と「幻胎」と「To the Moon」じゃないかと。

小野 私は正確に翻訳してほしいとはあまり思っていない。言葉は生き物です。翻訳が入ると私だけのものではなく訳者さんと二人の作品になるので、私に合わせるほしいとは思わないです。

スベツキオ イタリアの読者に届くような言語にすればそれで、と。

小野 アメリカ人の方に翻訳していただくときは、「ピュア」に出てくる〈国〉という言葉は、新しい単語を作ってイタリック

になって、ディストピアの話がよく出ていたんです。自分たちもディストピアのなかに生きているのではないかということ、イタリアだけでなく世界的にもディストピア小説がとて人気があります。イタリアでは隔離政策で三ヶ月も家のなかにいたので、飼い猫以外に誰とも会わずにいるのはつらかったですね。ディストピアじゃないかと思って。Netflixの作品でも、ディストピアもののドラマの人気が出ていました。パオロ・ジヨルダーノのエッセイ『コロナの時代の僕ら』のように、コロナについての読みものも出ていました。日本でも桜庭一樹さんの『東京ディストピア日記』が出ましたね。小野さんは、女性作家ではほかにどんな作品を読まれていますか？

小野 川上未映子さんですね。『乳と卵』がすごく好きです。あとは西加奈子さんや山崎ナオコさんともとても好きですね。読んできたものは純文学のほうが多いです。海外文学だとジュンパ・ラヒリさん。

スベツキオ まだ読まれていなければ、ナオミ・オルダーマンの『パワー』をお勧めします。『ピュア』みたいな設定というか、女性が男性よりも強くて、自分の手から電気が出るんです。『ピュア』も『パワー』も、女性が怪物のように描かれるの

にして大文字にしても良かったんです。

スベツキオ パトリア (Patris) にしてもいいかな。日本語だと国になります。ナシヨナリズムをふくめたニュアンスなんです。愛国のために戦う、というような。

小野 そんな感じですね。クニとカタカナで書きましたが、愛国者が言う国のイメージで書いていたのです。

スベツキオ 三島由紀夫の『憂国』になっちゃいますね。

小野 ユミは全然思っていないのだけど。『ピュア』特別ですね。その世界についてのクイアですね。文庫版に収録される短編「身体を売ること」も面白かったです。自分の身体を健康状態が良くない女性に売って、自分の身体を守るためにその人に近づく。自分の身体が他人の身体になっているところで世話をします。なぜ自分の身体だったときに世話をしていなかったのか？それは貧乏だからです。

小野 これはコロナがあったから書けた話ですね。人と触れ合えなくなると、もしみんながサイボーグになって機械の身体になったら、私たちはセックスしたり、家族同士でハグをしたり、手をつないだりや一切しなくなるのかなと考えて。そういう状態

で恋愛や友情は築けるのかと考えたんです。
スベツキオ 金原ひとみさんも『アンソール シャルディスタンス』を書かれていますね。

小野 どんな作家さんをこれまで訳してこられたのですか？

スベツキオ 林真理子さん、今村夏子さん、八木詠美さん、桜庭一樹さん、本谷有希子さん、岩城けいさん。東野圭吾さんの翻訳もしました。新美南吉さん、川村元氣さんも。でもメインは女性作家ですね。

小野 日本の小説を翻訳したいというアナさんの情熱はどこからくるのでしょうか。

スベツキオ もともと大学に入った時に漫画を翻訳したいと勉強し始めたんです。安野モヨコさんの『さくらん』、『鼻下長紳士回顧録』、『バッファロー5人娘』を訳しました。ほかにボーイズラブも翻訳しています。流行っていますね。

小野 マンガだとどんな作品がイタリアで人気があるんでしょうか。

スベツキオ ボーイズラブはなんでも流行っていますね。私は、ずっと漫画は読んできたんですが、大学三年ぐらいになって小説も面白いなと思いはじめたんです。日本の小説にはどんな作品があったのかわからなかったの、小川洋子さんを読んで、日本の小説も面白いと思って、そこから読み

出しました。漫画だけじゃなくて小説も翻訳したいなと思うようになった。そこで、翻訳学科に進みました。博士課程のときに、師匠にあたる先生から小説を翻訳してみないかと言われて、ぜひお願いしますと答えました。翻訳の才能があるとほめられて、それからずっと携わっています。初めて依頼されて訳したのは東野圭吾さんの『手紙』でした。そのあと東野さんの『白夜行』を訳して、それを読んだもう一人の編集者が、うちの会社でも翻訳してみないかといわれて、そこからどんどん他の作品も訳せるようになって。本当に翻訳は楽しいですね。

小野 すごく不思議です。日本ってマイナーな国なので。

スベツキオ イタリアもマイナーじゃないですか。イタリアと日本は似ているところも多いし、日本は文学の面で長い歴史もあります。日本文学は、世界の文学のなかでも一番好きですね。

小野 そういわれると誇らしい気持ちになります。イタリアで日本文学が読まれているのは意外だなと思っていましたが、関わりができるのは嬉しいですね。

スベツキオ 落ち着いたらぜひイタリアに来てください。

小野 絶対行きません。イタリア人読者から、直接私の作品や、日本文学について感じることを聞くのを楽しみにしています。